

[論文]

夫婦カウンセラーの語りからみた「話し合えない」 夫婦たちの問題の構造—M-GTAによる分析から—

The Structure of the Problems Faced by Couples Who 'Can't Talk' as Seen from the
Perspective of Couple Counselling :
An Analysis Using M-GTA

岡田 玖美子
(大阪大学)

要旨

今日、夫婦たちはどのような場合にコミュニケーションがかみ合わなくなるのだろうか。先行研究では、夫婦の固定的性別役割分業意識が弱まるなかで、コミュニケーションの問題がより顕著になっていることや、感情だけではなく合理性を重んじた個人主義的な文化の広がりも指摘されてきた。本稿は、夫婦関係の悩み相談を行う「夫婦カウンセリング」に着目し、カウンセラーたちへの半構造化インタビュー調査から、夫婦が「話し合えない」状態に陥るプロセスを明らかにするものである。

修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析の結果、おもに「話し合えない」状態には、【話していない】、【話し合い不成立】、【一方通行】という3パターンがあることが明らかになった。これらに【通底する難点】として、夫婦であってもそれぞれの状況のとらえ方や感じ方には経験や慣習によって違いがあるが、その違いに気づけないために、結果的にすれ違ってしまふという問題もあった。

また、現代の夫婦は各々多様な事情があり、一概にこうすべきといえない状況のなかで、とくに経済的劣等感を抱える専業主婦や子育てに積極的な「新しい」父親たちの孤独感、仕事にも精を出す働く母親たちの焦燥感など、社会構造上の問題もあった。ときに夫婦の理想像がむしろ夫婦の話し合いを阻害したり、話し合いを重視する度合いが妻と夫で異なったりすることで、自力での「話し合い」が困難となることがわかった。

キーワード：夫婦カウンセリング、M-GTA、コミュニケーション、夫婦関係

Abstract

In what scenarios might married couples encounter difficulty when communicating with each other? This paper focuses on couple counseling (which provides guidance on marital issues) and uses semi-structured interviews with counselors to clarify the process couples undergo to manage communication issues. Previous researches have indicated that married couples experience communication difficulty more prevalently

as fixed gender division of labor has decreased and individualist cultures emphasize rationality rather than emotionality.

Analyses results using the modified grounded theory approach (M-GTA) revealed that there are three primary patterns of “an inability to communicate”: noncommunication, “unsuccessful” communication, and unilateral communication. The common themes underlying these communication patterns are the differences in which marital partners perceive and regard their communication issues, depending on their experiences and customs, and their inability to recognize these differences, which result in estrangement from one another.

In addition, there were also social structural issues, such as the sense of isolation felt by housewives who feel economically inferior and “new” fathers who are active in child-rearing, and the frustration felt by working mothers, in a situation where it is not possible to say that couples should do things in a certain way, as each couple has their own diverse circumstances. Also, ideal images of a couple may hinder communication, depending on the degree to which each partner’s communication values differ from the other’s, making it difficult for them to communicate on their own.

Key words: couple counseling, the modified grounded theory approach, communication, marital relationship

1 夫婦関係におけるコミュニケーションのかみ合わなさ

「夫婦喧嘩は犬も食わない」という慣用句があるように、夫婦関係の悩みは私的なこととされ、自己解決が想定¹⁾されやすい。しかし、夫婦関係の悩みには当人たちだけでは解決しえない社会構造に起因する側面があると考えられ、それをとらえる要素の1つがジェンダーである。

日本の夫婦関係については、夫婦関係満足度やコミュニケーションの点でジェンダー・ギャップがあることが計量研究を中心に指摘されてきた。たとえば、1998年から日本家族社会学会全国家族調査委員会が実施している「全国家族調査(NFRJ)」では、一貫して結婚満足度は夫よりも妻のほうが高い一方で、相手に対する傾聴・助言・評価の頻度で測られる配偶者への「情緒的サポート」は女性の方が男性よりも多く行っていること²⁾が示されてきた(稲葉 2011)。

また、後述するように身の上相談などの投稿記事を分析した先行研究(大瀧 2002 など)からは、とりわけ妻の目線から夫婦不和の問題が析出されてきた。恋愛結婚が主流となっている現代において、多くの夫婦は結婚当初、あるいは交際当初は良好な関係であった場合が多いと想定されるなかで、どのようにして夫婦はすれ違っていくのだろうか。

そのような問題関心から本稿では、近年徐々に日本でも広がりつつある、夫婦関係に関する悩みを扱う民間のカウンセリング相談サービスに着目する。以下では、そのような専門家がサービスとしてカウンセリングや相談対応を行う実践を「夫婦カウンセリング」と呼ぶ。なお、本稿の「夫婦カウンセリング」は、夫婦関係に関する悩みについて、関係継続であれ離婚であれ、関係調整を

目的とした相談業務を行う実践とする。かつ、基本的に個人の内面にアプローチする一般的な心理療法・心理カウンセリングよりも、かなり幅の広い実践であることに注意されたい。

現在、日本で夫婦カウンセリングを行うカウンセラーたちの専門性は、臨床心理士や公認心理師などの心理学的な資格によるものだけではなく、家族法などの司法に関する知識、コーチング、ひいては、当事者としての結婚生活・離婚の経験など、多岐にわたる。そのような個々のカウンセラーごとの専門性の違いはあっても、民間サービスの場合は、有料で専門家に相談するという点で共通する。決して安価とはいえない金額³⁾を払って専門家に相談するような悩みには、どのような背景があるのだろうか。本稿では、なかには数千件規模の相談を扱ってきた経験をもつカウンセラーたちの目線をととして、夫婦関係におけるコミュニケーションのかみ合わなさをめぐる内実を明らかにする。

本稿は夫婦カウンセリングの現場において、とくに夫婦が「話し合えない」状態に陥っている場合に焦点をあてる。「話し合えない」といっても、その状況はカップルによってさまざまであることが一般に想定されるなかで、その道の専門家としてカウンセラーたちは、どのように「夫婦関係の問題」をとらえているのだろうか。社会学的な視点からカウンセラーたちの語りを分析することで、「話し合えない」状態に至るコミュニケーション上のプロセスとその社会的背景について明らかにする。

2 夫婦関係の悩みとコミュニケーションの変容をめぐる社会学的議論

2-1 身の上相談記事を用いた分析からの知見

夫婦研究においては、計量的なアプローチによって関係性とライフステージや社会的属性との関連が論じられてきたほか(西野編 2022 など)、子育て中の夫婦(孫 2022 など)やセックスレス(パッハー 2022)、離婚を経験した夫婦(Alexy 2020=2022)など、特定のトピックに焦点化した質的研究のなかで現代の夫婦の関係性の内実もとらえられてきた。だが、夫婦関係におけるコミュニケーションのかみ合わなさがどのようなものであるのかについては、体系的なレベルでは意外にもほとんど明らかになっていない。それは、夫婦の日常的なコミュニケーションの問題をどのようなデータによってとらえるのかという研究手法上の難しさによるところが大きい(大瀧 2002: 361)。

そのなかで、夫婦関係の問題についてデータから一定程度特色や傾向を明らかにしてきた研究群が新聞などの身の上相談欄を分析してきたものだろう。以下では、その知見から夫婦関係についての悩みにはどのようなものがあり、どのように変化してきたのかについて確認する。

夫婦関係の悩みについて網羅的に分析した大瀧友織(2002)は、1953年から1999年までの読売新聞の「人生案内」欄の分析から、夫婦間に生じている問題(浮気/問題行動/性格不満/経済問題/関わり欠如/家族・親族/その他)について4期に分類し変容を指摘した。全体的には、夫婦の悩みのなかでもっとも多い相談は「浮気」に関するものであるが、とくに1970年代ごろから「性格不満」「関わり欠如」の割合が増えていったという。

「性格不満」とは、「夫の性格や態度に対する不満を抱えている悩み」であり、「関わりの欠如」は、「夫との精神的及び肉体的な関わりやつながりを求めているにもかかわらず、それが満たされな

いことに関する相談」を指すという(大瀧 2002: 367)。

殊に、大瀧の分析によると1990年代以降は、相談、および相談に対する専門家による回答でも、「愛し愛されている実感」を求めることは「甘え」でも「ぜいたく」でもなく「当たり前のこと」という価値観が広がっていったと述べている。この傾向について、大瀧はAnthony Giddens (1992 = 1995) の「純粋な関係性」概念と関連づけ、主体的に選択できる範囲の広がり「型」がなくなったことによる不安定性というアンビバレントな状況を見出した(大瀧 2002: 373-4)。

この大瀧の指摘をより日本の社会的背景に即して解釈するなら、山田昌弘が簡潔に述べているように、高度経済成長期には、結婚後はコミュニケーションがなくても「夫は外で稼ぎ、妻は家事・育児を行う」という固定的性別役割に従っていれば愛情があると信じる事ができたが、物質的に豊かな生活が実現するなかで夫婦関係において役割よりもコミュニケーションが重視されるようになり(山田 2005)、そのことが社会における夫婦関係の悩みのとらえ方自体を変えたともいえる。

2-2 対等なコミュニケーションを重んじるうえでの新たな文化

さらに、固定的性別役割分業という「型」がなくなるなかで、新たなコミュニケーション文化も生じているようである。大瀧と同じく読売新聞の「人生案内」欄について、池田知加(2017)は2000年代以降2015年までの動向に範囲を広げて分析した。そのなかで、2000年代以降においては「相談者たちが対等な夫婦関係における率直な感情の表出と水平的なコミュニケーション」と同時に、感情に流されるのではなく、「『事務的』に判断することも求められ」と指摘し、個人化との関連を論じた(池田 2017: 37)。

この感情と合理性に関する指摘は、日本に限らない現代社会あるいは後期近代における現象として、海外でも重なる議論がある。よく知られているものは、Robert Bellahらの『心の習慣』(Bellah et al. 1985=1991)で、Ann Swidlerを中心に夫婦生活におけるセラピー文化の影響として挙げられた、「表現的個人主義(expressive individualism)」の問題である。また、セラピー的な夫婦の理想像の言説は、表現的個人主義だけではなく、「戦略的な損得計算をも前提」としている点で、功利的個人主義をも取り込んでいるという(Bellah et al. 1985=1991: 139)。

さらに、文化社会学者のEva Illouzは、心理学や精神医学などの科学知による「愛の脱神話化」、フェミニズムによって社会に広まった「平等」と「公正」というポリティカルな理想、そしてマッチングアプリなどインターネットによる選択のテクノロジーの強化という3つの要素によって、現代の恋愛愛的コミュニケーションの様相が変化したと論じている(Illouz 2012 = 2024: 第5章)。

以上の知見をまとめると、日本では1970年代以降、夫婦間の親密性やコミュニケーションが重視され、1990年代にはそれが「当たり前のこと」となる一方で、ロマンティックな感情だけでは互惠的で対等な夫婦関係を築くことができなくなった。そのような夫婦の関係性に関する悩みに対して、2000年代以降は、心理学や個人化の影響のもと率直な感情表出と双方向的なコミュニケーション、さらに感情に流されない合理的判断の必要性を専門家たちは提唱するようになったといえる。

ただし、この文化はメディア上の言説において顕著であり、すべての夫婦の実態に一般化でき

るものではない。先述の『心の習慣』においても、実際のところは、アメリカ人がセラピー言説でいわれるほど「自己中心であるわけではない」とされており (Bellah et al. 1985=1991: 136)、言説として表出される顕著な特徴がすべてではないだろう。言説の影響力を考えるうえでも、実際に悩みを抱えた夫婦の相談に応じる専門家たちは、どのように夫婦の関係性をとらえているのか検討するという本稿の試みは重要である。

3 研究方法

3-1 調査方法とカウンセラーの類型

本稿で用いるデータは、2022年2月および2023年2月に実施した、関東・関西の都市部を拠点とする専門性の異なる5つの民間サービス機関における、計7名のカウンセラーへの半構造化インタビューから得たものである。インフォーマント7名は、いずれも10年前後、夫婦カウンセリングに携わっており、毎月数十件のペースで業務を行っている。守秘義務に反しない範囲で、大まかにどのような相談事例がみられるのか、どのように対応を行っているのかを中心に聞き取りを行った。したがって、具体的な個別事例の詳細については聞き取ることができない点で、データの制約・限界がある。

調査対象者の選定にあたっては、心理学の有資格者に限らず実際に夫婦関係の悩みの相談先として機能している多様な実践をとらえるため、最初に今日有効な情報発信の場となっているインターネットに着目した。「夫婦」「カウンセリング」「相談」「悩み」などのキーワードを組み合わせで検索し、各カウンセリング機関のホームページを主とするヒットした情報をもとに、どのような夫婦カウンセリングの実践があるのかについて、類型化を行った。各類型の特徴については、表1にまとめたとおりである。

類型	関連する資格・経歴	活動地域の広がり	よくある形態
関連する業務からの参入 (心理系)	臨床心理士、公認心理師、 家族相談士、 精神科医など	都市部・地方部ともにあり	個人事業主
関連する業務からの参入 (司法系)	行政書士、 元家庭裁判所調査官、 元家庭裁判所調停委員 など	都市部・地方部ともにあり	個人事業主
コンサルタントやコーチング などからの参入 (コーチ系)	? (心理学、セラピーに関するアプローチを掲げているものの、学派レベルの記載がなく、専門性については不明確なものが多い)	東京都内や 関西都市圏	複数人のカウンセラーを抱え法人等として運営
自身の体験を背景とした参入 (当事者系)	民間認定資格など	SNSやオンラインを主軸に活動し詳細が不明な場合が多い	どの程度本格的な事業として行われているか不明確な場合が多い

表1 夫婦カウンセリングの類型

この類型を参考にインターネット上でホームページなどを確認し、所在地や連絡先、経歴、実績が一定程度確認できる方にお問い合わせフォームなどから依頼を行った。したがって、日本の夫婦カウンセリングサービス事業者のなかでは、かなり安定的かつ良心的なかたちで事業を行っている層に該当する。また、10人以上のカウンセラーが在籍しているような大規模かつメンバーが流動的な機関は、個々のカウンセラーの経験値や方針が判別しにくいいため依頼先から除外した。

ID	機関	類型	資格	年齢	性別	調査日	形式	インタビュー時間
Aさん	①	司法系	行政書士	50代	女性	2022/2/8	対面	1時間10分
Bさん	②	心理系	公認心理師・家族相談士など	50代	男性	2022/2/28	対面	1時間14分
Cさん	③	コーチ系		50代	男性	2023/2/16	オンライン (2人同時)	1時間27分
Dさん		コーチ系	米国GALLUP社認定ストレングスコーチ	40代	女性			
Eさん		司法系	臨床心理士・行政書士、元家裁調査官	40代	女性			
Fさん	④	当事者系	米国NLP協会認定プラクティショナー、 NPO法人日本家族問題相談連盟認定 上級離婚カウンセラーマリッジカウンセラー資格・養成講座インストラクター、 家庭裁判所 家事調停委員	50代	女性	2023/2/20	オンライン (2人同時)	1時間21分
Gさん	⑤	当事者系	夫婦カウンセラー、 家族療法カウンセラー、行動心理士、 子育てアドバイザー、 コミュニケーション心理学トレーナー、 マスターコーチなど	50代	女性	2023/2/15	オンライン	1時間40分

表2 インフォーマント一覧

おもな質問項目は、夫婦相談業務を行うようになった背景・契機、これまでの経験のなかで感じたことや考えの変化、相談業務における困難や工夫、夫婦関係についての問題意識、ジェンダーに関する視座である。カウンセラーの業務上の守秘義務により、面接への立ち合いや個別の相談事例についての聞き取りはできないことをふまえ、あくまで個別事例を特定しないかたちで語ってもらった。許可を得てICレコーダーで録音したものを文字起こしし、分析データとした。

調査にあたっては、所属する大阪大学人間科学研究科社会学・人間学系研究倫理委員会の審査・承認を受けた(受付番号:2021035)。調査時には、調査概要や個人情報の保護、カウンセラーの守秘義務への配慮、研究の中止や中断、成果の公開予定、謝金について説明を行い、同意を得た。インフォーマントの特定を避けるため、表1を含め記載する情報は分析に影響しない範囲で一部省略や加工を行った。

3-2 夫婦カウンセリングを利用する人びとの傾向

夫婦カウンセリングを利用する夫婦とはどのような人たちなのだろうか。カウンセラーには守秘義務があり、詳細は一般によく知られていない。ここでは、あくまでインフォーマントの概観として、来談者の傾向を確認する。

年齢層については、20代や50代以降もいるものの、大体のインフォーマントは30代から40代が多い印象だと語っていた。来談者の男女比は機関によって若干異なるものの、3対7、または

4対6と若干女性のほうが多いところが多かったが、男性からの相談も少なくはないという。

もっとも特徴的な点は、高階層・高収入・高学歴層が多い点である。職業でいうと、経営者、医師、公務員、大学教員、弁護士、一部の機関では芸能人と、いわゆる社会的地位が高く「恵まれている」はずの人びとである。夫婦のタイプとしては、専業主婦世帯、共働きで家事や育児の共同性が高い「平等主義的カップル」といえるようなケースが多いそうである。たとえば、「カウンセリング料金も結構高いですし1回1回お金がかかりますので、家裁(家庭裁判所での円満・離婚調停など)に比べてやっぱり費用がかかるんですよね。そういった意味では、年収ベースでいくとやっぱり5、600万円は少なくともないとやっぱりしんどいと思います。1000万ある人たちもいっぱいいます。」(Eさん：司法系)と語るインフォーマントもいた。

相談内容としては、専門性の違いによって若干機関ごとの差はあるものの、離婚、配偶者のアルコールなどの依存症、婚外恋愛(不貞行為)などの大瀧(2002)の新聞紙上のお悩み相談でも長年典型的であったものから、セックスレスやモラルハラスメントを含むコミュニケーション不和、価値観の相違など、「漠然とした」(Cさん：コーチ系)夫婦関係の相談が増えてきているという話もあった。また、複数のカウンセラーがコロナ禍以降、相談が増えたことや、近年夫婦カウンセリング自体の認知度や検索数が増えている印象にあることを語った。

そのほか、調査対象者を絞る時点で、ある程度の活動実績と連絡先が明確であることを考慮したため、インフォーマントは関東・関西の都市圏に拠点を置いており、利用者も結果的に都市部在住の夫婦であることが多いと想定される。ただし、コロナ禍もあって近年ではオンライン・カウンセリングを導入している機関もあるため、その場合には全国から依頼が来るということもあった。国内の地域性も重要な点ではあるが、今回の調査および分析では関心の主眼ではないため踏み込まない。

したがって、本稿で論じる夫婦たちのイメージをまとめると、具体的には都市部の比較的高学歴・高収入・高階層の30代から40代の夫婦が大半で、おもに妻が専業主婦の性別役割分業タイプと夫婦共働きで平等主義的タイプに大別される。

3-3 分析方法

分析では、木下康仁の「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach)」(以下、M-GTAと略記)を用いる。M-GTAは、社会的相互作用に関係し、人間行動の説明と予測に関わり、かつ限定された範囲内における説明力に優れた理論を生成する(木下 2003: 27)。また、M-GTAは問題解決型、課題解決型の研究に適しているとされ、生成される理論は実践活用のためのものである。これらの点をふまえると、M-GTAは、夫婦カウンセリングという限定された範囲内で、第三者の専門家がどのように来談者の夫婦関係を問題化し、関係調整していくのかというプロセスを明らかにする本稿の目的に合致する分析手法であるといえる。

具体的な分析プロセスにおいては、M-GTAの場合、まず〈分析テーマ〉と〈分析焦点者〉の設定が重要である。〈分析テーマ〉は、「データに対してどのような“角度”で分析に入るか」を意味し、何らかの“うごき(変化・プロセス)”を明らかにするものである(木下 2003: 134-5)。もう1つの〈分析焦点者〉は、「一定の条件設定で定義される集合的他者で、面接対象者の選定の基準になり、データの解釈の際に経由する視点となり、分析結果の一般化可能な範囲を規定するもの」

(木下 2009) で、通常は分析対象者を指す。これらの手順によって分析上の問題意識を明確にすることがデータに密着した分析を行ううえでも、生成した理論の妥当性・応用可能性を検討するうえでも重要なのである。

さらに、M-GTA では、おもに「オープン・コーディング」と「選択的コーディング」という2種類のコーディングによって、機能的にはオープン化と収斂化を行う。そして、これら2つの分析プロセスにおいて、オープン化と収束化が最大化したところが理論的飽和の到達点であるとされている(木下 2003: 142)。なお、M-GTA では、データから導かれた分析の最小単位はコードではなく、〈概念〉と呼び、複数の概念の関係で構成される要素を〈カテゴリー〉と呼ぶ(木下 2003: 150)。

3-4 分析の大まかな手順

具体的な分析については、木下(2003, 2020)をもとに以下の手順で実施した。(1) データに密着した分析を進めるにあたり、本稿での〈分析テーマ〉を「夫婦カウンセリングを専門とするカウンセラーからみたカウンセリングに由来する夫婦が悩みを『話し合えない』状態に陥るプロセス」とし、〈分析焦点者〉を『話し合えない』夫婦と日々向き合う多様な専門性を有するカウンセラーとした。(2) 〈分析テーマ〉と〈分析焦点者〉に照らしてデータを読み込み、オープン・コーディングを行った。(3) 「分析ワークシート」の「具体例」欄に該当する語りを記入し、その具体例の解釈をもとに〈概念〉名と定義を記入した。この際、気づいたこと、考えたこと、採用しなかった解釈などは「理論的メモ」として付記した。(4) さらにデータのほかの箇所に類似例がないか検討し、生成済みの〈概念〉の具体例を追加した。(5) 上記(2)～(4)を繰り返しながらデータの分析を進め、〈概念〉生成の際には、その〈概念〉と関係しうる別の〈概念〉および対極例を念頭におきながら、〈概念〉間の関係を検討した。(6) 新たな〈概念〉や具体例・対極例がそれ以上見つからない状態になったら、生成された概念の行為としての類似度や時間的順序などの関連を検討し、〈カテゴリー〉にまとめる選択的コーディングを行った。(7) 最終的に生成された〈概念〉と〈カテゴリー〉との間の関係をまとめた結果図(図1)を作成し、その概要を簡潔な文章にまとめたストーリーラインを作成した。

以下では、生成した3つの〈カテゴリー〉ごとに〈概念〉の定義および具体例、〈概念〉間の関係を中心として、分析やデータの背景を適宜補足しながら説明する。

4 夫婦が「話し合えない」3つのパターン

カウンセラーに寄せられた、夫婦が「話し合えない」悩みは、トピックとしては、コミュニケーション不全や性格の不一致などのすれ違い、片方のモラルハラスメント、セックスレス、婚外恋愛など、多様であった。しかし、「話し合えない」状態については、析出した〈カテゴリー〉をふまえると、①実質的に互いに向き合って話していない状態が続いているケース、②互いに意見をぶつけ合ったり、主張が平行線だったり、話し合いが困難なケース、③片方が話し合いに応じないケースに大別できた。これら3つのケースに共通して影響を与える問題として、“とらえ方・感じ方の癖によるすれ違い”と“夫婦規範の無効化”という概念も語りからはみえた。

以下では、それぞれの〈カテゴリー〉と〈カテゴリー〉間の関係について、〈概念〉を用いて説明する。なお、本文中で概念は“ ”、カテゴリーは【 】で示した。

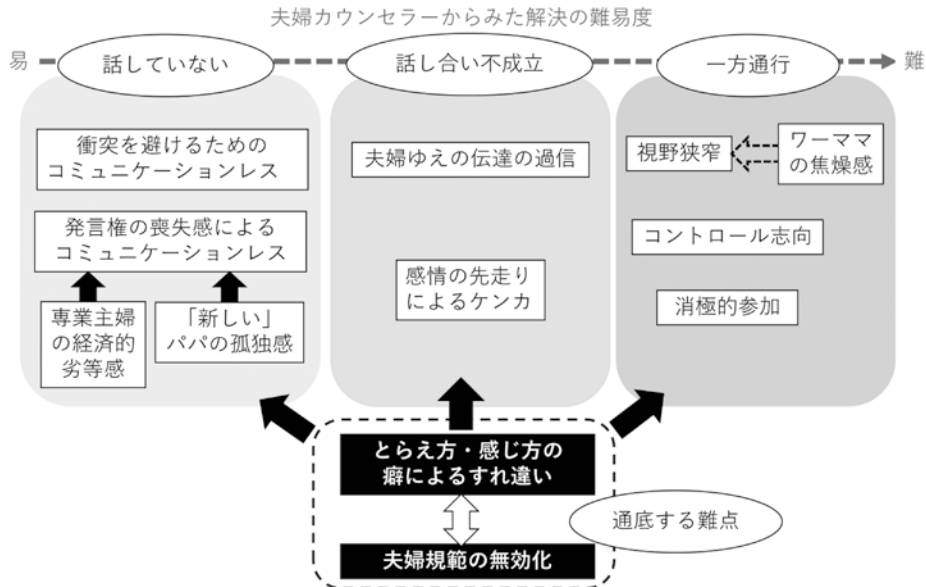


図1 夫婦カウンセリングを行うカウンセラーからみた夫婦が「話し合えない」状態に至る3パターン

4-1 【話していない】ケース

まず、【話していない】ケースが、関係改善を望む場合には意外と多いということであった。そのなかのパターンとしては、「衝突を避けるためのコミュニケーションレス」と「発言権の喪失感によるコミュニケーションレス」と概念化できる状況が語られた。

1つめの“衝突を避けるためのコミュニケーションレス”の定義は、「コミュニケーションをとることで意見が対立した過去の経験から、これ以上関係が悪化することをおそれ、コミュニケーションをとること自体を止めたり消極的になったりすること」である。その具体例としては、以下のような状況が語られた。

それと1回(の面談)で解決することってわりとあるんですね。うまくいってないときってコミュニケーションとろうとすると衝突してしまうから、それならしないほうがマシだと思ってコミュニケーションレスがずっと続いてしまってもどちらかが(カウンセリングに)申し込んで『行きたいんだ』ってパートナーに言いました、で、それがきっかけでコミュニケーションが復活することがあるんですね。(Bさん：心理系)

このパターンの場合には、「夫婦カウンセリングに行きたい」と声をかけることや、実際に夫婦カウンセリングに1回行ってみることで、これまで抑制されていたコミュニケーションが促進され、あっさりと関係改善に至る場合も「意外と少なくない」⁴⁾(B、C・D、Gさん)ということであった。

2つめの“発言権の喪失感によるコミュニケーションレス”は、定義としては「自分には、その悩みや感情を抱く、あるいは、それを不満や要望として誰かに主張する権利がないと思い、発言をやめること」を指す。とくにこのパターンでは、現代の社会状況や家族のありようの変化、具体

的にいうと、かつての「夫は仕事、女性は家事・育児」という性別役割分業規範に大きな揺らぎが生じ、若い世代では実態としても共働きで子育てや家事も協力して行かたが増えていることの影響が2つの概念——“専業主婦の経済的劣等感”と“「新しい」パパの孤独感”——から示唆された。これら2つの概念は、来談者が専業主婦世帯であれ共稼ぎであれ相対的に世帯収入が高く、子育て世代で家庭生活と仕事のバランスが問題となりやすい30・40代が多いという特徴と関連しているだろう。

前者の“専業主婦の経済的劣等感”は、「専業主婦が『稼いでいない』ことにより、夫よりも自分は劣等にあると感じ、また、それゆえに離婚を考えられない状態に陥ること」を意味する。自身も夫婦関係に悩み離婚した経験があるGさん(当事者系)は、「(自身の夫婦関係で専業主婦時代に)お金を稼いでないことでへりくだってしまった。こんなこと言っちゃいけないって。」と語った。さらに、「専業主婦の人はみんな口を揃えて、『いや経済的に不安だから、離婚できません』ってみんな言う」(Gさん：当事者系)という。類似例は、Dさん・Eさんからも語られ、経営者や医師など「経済的にすごく裕福」(Dさん：コーチ系)で、近代家族モデルの性別役割分業ができてしまうからこそその悩みが示唆された。

この近代家族的な“専業主婦の経済的劣等感”に対して、より先進的・現代的な夫婦モデルだからこそその悩みもみてとれた。それが、もう1つの“「新しい」パパの孤独感”である。これは、「子育てを当然のこととして夫婦で分担し、従来の『夫が仕事、妻は家事・育児』に当てはまらない状態であるがゆえに、孤独感を抱えている、または将来的に孤独に陥りかねない状態」を指す。具体的には、以下のような語りがあった。

とくに育休をとられている男性のご相談が増えていて、しかも割とフルで育休取ってますっていう。この問題って女性のワンオペの相談よりもかなり問題としては根深い。それはママ友だったら話聞いてくれる(人がいる)けど、同じパパでそこまで育休とってる人っていないので。女性以上に孤独感を感じているなって。(Cさん：コーチ系)

これらの概念からは、詳細は異なるとしても、夫婦の片方が2人の関係性やその周囲を取り囲む社会状況のなかで、「不適切」と思われる感情を抑制してしまうことがわかる。経済面で夫への「負い目」や「離婚後の不安」を感じる女性は、夫婦関係や結婚生活について不満や苛立ちがあったとしても、そのような感情を相手に伝えることは「不適切」であると感じて抑制してしまう。同様に、子育てに参加する「新しい」タイプの若い父親たちも、そのような子育てを積極的にする父親が少数派であるなかで思いを共有できる存在は少なく、かといって男性ならではの状況にも関わる悩みや苦しさを妻に吐露することも容易ではないために、結果的に抑制してしまう。

殊に、後者の“「新しい」パパの孤独感”については、男性が「当たり前のこと」として家事・育児に関わりたいと思う一方で、そのスタンスや希望を实践するうえでの困難について周囲と共有できないことによる悩みが近年メディアや研究で取り上げられつつある(朝日新聞「父親のモヤモヤ」取材班 2020; 中里 2023)。

「話し合えない」状態に至る過程で「話し合えていない」だけであれば、夫婦カウンセリングに頼るまでもないと思われるかもしれない。事実、上述したように、夫婦カウンセリングに誘う、ま

たは1回行ってみるだけで関係が改善する・問題が解決するという場合も少なくないということだった。しかし、それほど実は解決可能性の高い状況であっても、当人たちだけだと日々の生活のなかでは各自の思いを伝えることが「不適切」ではないかと考え、コミュニケーションレスになってしまうのである。そのことをカウンセラーたちは軽視せずに、「話していないことも夫婦関係の大きな問題」としてとらえていた。

4-2 【話し合い不成立】なケース

次に、話し合っているものの、その話し合いがうまくかみ合っていないという【話し合いが不成立】なケースをみる。この〈カテゴリー〉に該当する〈概念〉は、“夫婦ゆえの伝達の過信”と“感情の先走りによるケンカ”である。すべてのインフォーマントがこの両方ないし、どちらかに言及していた。

まず、“夫婦ゆえの伝達の過信”は、「実際には伝え残しや相手に伝わっていないことがあるのに、親密な関係だからこそ自分は伝えたつもりになって伝達不足を疑わないこと」を指す。わかりやすい具体例としては以下のような語りがあった。

夫婦って他人じゃないですか。夫婦になると甘えが出て、日常生活の中で向き合えてない。(……) お話をお聞きすると、「それはもう話ししたんです」っておっしゃるんですけど、それは話したつもりになってません？っていうやりとりって結構あって。「伝えてるんです。でも変わってくれない」っておっしゃるんですね。でも、それは伝えたつもりになってて、実は伝え残してあると思うんですよって。だからその、会話でのやりとりってそのときの感情とか表情とか声の大きさとか言葉のチョイスとかでいろんな食い違いって絶対生じてて、本人は伝えたつもりになってるんですけど、でも3割とか4割しか実際は伝わってないことって非常に多いと思ってるんですよ。(……)で、ご本人は伝えたつもりなのに変わってくれないから、結局また自分が傷つくんですよ。(Aさん：司法系)

この語りからは、明確な「他人」同士の人間関係とは異なる夫婦関係だからこそその問題と、その問題に当人たちは気づきにくいことがわかる。この近い存在だからこそその問題であるという点は、もう1つの“感情の先走りによるケンカ”にも当てはまる。“感情の先走りによるケンカ”は、「互いの食い違いに気づかないまま、あるいは、それを無視して、互いに一方的に感情をぶつけ合うこと」を意味する。たとえば、Cさん(コーチ系)は、「話しにくいことを話したらケンカになっちゃう」と語った。Gさん(当事者系)も「マウント取り合うわけですね。譲らないので、どこまでいっても平行線で2人だけではケンカで、なんかもうどうしようもないっていう状態で来られる方は結構多い」という。さらに、Bさん(心理系)は、カウンセリングの最中にも夫婦それぞれの「感情が先走って」ケンカが始まる場合があるといい、そのような場合には、あえてケンカを観察して普段のコミュニケーションの様子を確認すると話していた。

これら2つの〈概念〉は、どちらも親密な関係だからこそ、「言葉を尽くさなくとも自分の感情は伝わるはずだ」という暗黙の了解が各夫婦にあることによって生じているとインフォーマントたちには考えられていた。「話し合っている」つもりなのに、「話し合い」にならないという齟齬、

その想定と実態との乖離は、とくに夫婦という互いに身近な存在で一定の相互行為の蓄積があるからこそ、当人たちには理解しにくく容易に解消できなくなっている。

4-3 【一方通行】ケース

3つ目は、夫婦の片方に話し合う気や関係改善の意志がないことで、「話し合えない」状態に陥ってしまっている【一方通行】ケースである。このケースには、“視野狭窄”、“コントロール志向”、“消極的参加”の3つの概念が該当する。

第1の“視野狭窄”は、「自分本位な考えに固着し、パートナーや子どもの視点、俯瞰的な視点に立てず、視野が狭まっていること」を指す。たとえば、「夫婦、家族に限らずストレスフルなときって、言ったらスマホをこうやって(顔を画面に近づけて)見てる感じなんすね。もう見えない。これしか見えないわけですね。」(Bさん：心理系)、「2人で話していると関係性が近すぎるし、それぞれにそれぞれの価値観っていうのが間違っていないって思いすぎちゃうというか、違う角度からもう完全に見えなくなってるっていうことが事態を悪化させてると思うんですよ。」など、どのカウンセラーも「話し合えない」夫婦の問題の1つとして、俯瞰的にものごとをみられなくなっていると語っていた。

この“視野狭窄”には、以下の例のように、その人の価値観やこれまでの経験、2人のこれまでの関係性が影響しているというみかたもあった。

たとえば「なんでここで怒るんだろう」とか「冷たくされるんだろう」みたいなことをもうちょっとカウンセリング的に深掘りしてみると、なんだろう…飲み会にいつて遅く帰ってきて、あまりにヒステリックに怒られるみたいなことがあるってなったときに、そこは過去の「自分が浮気された」みたいなことと紐づいていて、心配になっちゃっているからみたいなこともあるかもしれないし (Dさん：コーチ系)

この“視野狭窄”の背景はさまざまであるが、近年特徴的なケースとしてハイキャリアで子どもがいる女性が離婚を強く主張するケースがあるという。この「自身に(夫と同程度がそれ以上の)稼ぎがある状態で、夫に対して苛立ちや不満を抱えており、おそらく自身に親権が渡る可能性が高いことから離婚を厭わないこと」を“ワーママの焦燥感”と名づけた。以下の語りのほか、Cさん(コーチ系)も「女性側のハイキャリアでハードワークで、なおかつ子どももいらっしゃるっていう女性の悩みは男性のそれよりもまた根深かったりするんですね。」と語っている。働くママ(ワーママ)は、仕事と子育てに忙しいなかで夫に対して不満や苛立ちを募らせると、「一刻も早く離婚したい、離婚しかない」という選択肢に駆り立てられていくのである。

仕事されてる女性で、相談者のなかで、男性よりも年収高かったりとかして平気で、しかも子どもも(相手に親権)取られないので、平気で離婚を選ぶんだけど、それも、わたしは、いや、なんか「あなたは何もね(失わないけど)、これが逆の立場で子どもを取られる、子どもと一緒に住めなくなるって言われたら、そんな簡単に離婚って言えますか」っていうことを女性に言うこともあるんですよ。(Gさん：当事者系)

この“視野狭窄”がより強固かつ高圧的なかたちになったものが、2つ目の“コントロール志向”ともいえるだろう。“コントロール志向”とは、「カウンセリングにおいても、相手との関係においても自分の思いどおりになることを第一とし、それが叶わないと怒り出すこと」を指す。来談者のなかには、「やっぱり何か説得してほしいみたいなことをね、やってもらえるんですかっておっしゃる」(Aさん：司法系) 場合や、「カウンセリングを自分の思いどおり進めてほしいという、ちょっとコントロールするタイプの人は、自分の思ったとおりに進まないと怒り出す」(Gさん：当事者系) 場合もあるという。わかりやすい表現でいうならモラルハラスメントなど、「いろんな夫婦のかたち、ありようがあってよくって、(でも)それが理解できない、なんていうのかな…自分の価値観をこうでしょっていうのを相手に強要する」(Gさん：当事者系) 場合に夫婦関係がうまくいかなくなっている。

この自分の感情や価値観を強く相手に主張するパターンの逆ともいえるのが、3つ目の“消極的参加”である。これは、「夫婦関係について話し合うことに対して消極的あるいは否定的であり、普段から話さず、カウンセリングにおいてもあまり話さないこと」を意味する。日本の夫婦カウンセリングの多くは、片方のみでも利用できるため、来談者の配偶者のなかには『『なんでそんなところ行かないといけないの、第三者にそんな家族のこと、どうして夫婦のことをどうして話さなきゃいけないの』っていう方』(Bさん：心理系) もいるという。

加えて、来たとしても「(困るのは) どちらかが話す気がないときですね。『俺は話す気がないから』って、ずっと無言みたいな人」(Gさん：当事者系) もいるという。ただし、このような場合にはBさんが「元々そういう方っていうこともありますよね。(心を) 開けないっていうね。」というように、普段から自分の感情を言語化するのが苦手な人もいようである。他方で、Eさん(司法系) が「自己完結型の方は、もう自分で結論出しちゃう」というように、話し合い自体をする気がなく、自分の考えのみで決断し、それ以降の話し合いにも応じようとしなかった場合もあるという。

以上のように、一時的に視野が狭まっている場合、あるいは高圧的、消極的・否定的な場合など、夫婦のどちらかが「話し合う」という姿勢・行動をとることができない状況だと、「話し合いたい」と思っている側の人は、自分だけではいわば「独り相撲」「暖簾に腕押し」となるため、どうしてもなくなった結果、カウンセラーを頼りとするのである。

4-4 【通底する難点】

最後に、上記の3つのパターンのすべてに【通底する難点】として、“とらえ方・感じ方の癖によるすれ違い”と“夫婦規範の無効化”について述べる。

“とらえ方・感じ方の癖によるすれ違い”とは、「夫婦であってもそれぞれの状況のとらえ方や感じ方には、それまでの経験や慣習によって癖があり、その違いに気づけないために、結果的に意見や行動もすれ違ってしまふこと」を指す。すべてのカウンセラーが、この癖に違いがあること自体ではなく、その癖の違いを理解しないまま、夫婦が関わり合うことで結果的に「話し合う」過程で看過できない、すれ違いが生じていることを問題視していた。

コミュニケーションってなんか会話さえ交わしていたらコミュニケーションいいかっていうとそうじゃないと思うんですね。(……) (ある1つのことについて頭のなかで) 同じ絵を描かない

こともあると思うんですね。それをわからないまま話していても噛み合わない。

(Bさん：心理系)

この“とらえ方・感じ方の癖によるすれ違い”は、【話していない】ケース、【話し合い不成立】なケース、【一方通行】ケースという「話し合えない」状態に夫婦が陥る3つのパターンのそれぞれにもつながりうる問題とされていた。このすれ違いにまず気づいたうえで、「さあどうしますかっていうことを一緒に考えましょう」(Eさん：司法系)、もしくは「違いがわかったら一步前進」(Bさん：心理系)というように、ここが「話し合い」のスタート地点なのである。

他方で、より現代の社会背景を反映している難点が“夫婦規範の無効化”である。“夫婦規範の無効化”とは、「かつての性別役割分業型の近代家族モデルとは異なり、夫婦はそれぞれいろんなかたちや事情があり、一概にはこうといえないこと」を意味する。とくに自分自身も夫婦関係に悩み離婚した経験があるGさん(当事者系)は、「(夫婦関係についてどうすべきか)わたしが25歳のときに誰も教えてくれなかった。母に聞いても『わからない』って。自分が経験したことしかわからないから。」と語った。

上述の“「新しい」パパの孤独感”や“ワーママの焦燥感”にも重なるが、1970年代までのような近代家族モデルの夫婦関係は、「標準モデル」としてはもはや現実的にありえなくなってきたなかで、個々の夫婦を取り囲む状況も多様化・流動化している。Cさん(コーチ系)の語りによれば、かつてはパターン化された相談が多かったが、最近では「もう漠然とした夫婦仲の問題っていうものが増えてるなっていう印象」を持っているという。Aさんも「この婚姻関係にある方の悩みとか相談っていうのは、まず答えが見つかってなくて『どうしていいかわからない』っていう相談が大半。」(Aさん：司法系)と語っていた。つまり、もはや共通の普遍的な「夫婦はこうあるべき、こうすべき」という規範が失われているからこそ、それぞれの夫婦・家族、そして来談者にとっての「答え」を探すしかないが、その過程で自分も相手も漠然とした悩みにとらわれ、「どうしていいかわからない」状態に陥ってしまうのである。

5 「話し合えない」状態とその背後にある構造的問題

前節でみてきた各〈カテゴリー〉〈概念〉をもとに、『話し合えない』夫婦と日々向き合う多様な専門性を有するカウンセラー」の視点をとおしてみた、「来談した夫婦が悩みを『話し合えない』状態に陥るプロセス」のストーリーラインをまとめると以下ようになる。

「話し合えない」状態に陥るパターンはおもに3つあり、比較的解決が容易な【話していない】場合には、過去の経験から“衝突を避けるためのコミュニケーションレス”に陥っている場合がある。他方で、近代家族モデルの問題ともいえる“専業主婦の経済的劣等感”や、逆に従来の「夫が仕事、妻は家事・育児」に当てはまらない“「新しい」パパの孤独感”にもとづいた、とくに一方の“発言権の喪失感によるコミュニケーションレス”もありえる。

より解決の難易度が上がる、【話し合い不成立】の場合には、親密な関係だからこそ伝達不足を疑わない“夫婦ゆえの伝達の過信”と互いに感情をぶつけ合う“感情の先走りによるケンカ”という2つの場合がありうる。

もっとも解決が難しい【一方通行】の場合は、自分本位な考えに固着し俯瞰的な視点に立てない“視野狭窄”、夫婦関係においてもカウンセリングにおいても自分の思いどおりになることを第一とする“コントロール志向”、話し合い自体に消極的・否定的な“消極的参加”に細分化できる。とくに“視野狭窄”については、夫と同程度かそれ以上の経済力があり親権を失わない可能性が高い女性たちの“ワーママの焦燥感”による場合もある。

これらの3つのパターンに【通底する難点】として、夫婦であってもそれぞれの状況のとらえ方や感じ方には、それまでの経験や慣習によって癖があり、その違いに気づけないために、結果的に意見や行動もすれ違ってしてしまうという“とらえ方・感じ方の癖によるすれ違い”の問題がある。また、かつての性別役割分業型の近代家族モデルとは異なり、現代の夫婦はそれぞれいろんなかたちや事情があり、一概にはこうといえない“夫婦規範の無効化”によって、当人たちだけでは「話し合えない」状態から容易には抜け出せないのである。

このカウンセラーからみた夫婦が「話し合えない」状態に陥るプロセスは、「話し合えない」というコミュニケーションのかみ合わなさにも、いくつかの段階や次元があることを示唆している。夫婦は、いきなりかみ合わなくなるというよりも、そもそも【話していない】パターンもあれば、話してはいるが【話し合いが不成立】なパターン、あるいは一方は話そうとしているが、相手が十分に応じることのない【一方通行】なパターン、いずれも何らかの相互行為上の問題があることで悩みがあっても「話し合えない」ことが夫婦関係を悪化させることにつながっていた。

さらに、この「話し合えない」状態に陥るプロセスからは、固定的な性別役割分業のもとでの“専業主婦の経済的劣等感”や、子育てに積極的に向き合う“[新しい]パパたちの孤独感”、あるいは、仕事と子育て両方に奮闘するからこそその“ワーママの焦燥感”など、1970年代ごろまでの「標準モデル」であった近代家族モデルの問題や、そこから人びとの意識や実際の生活モデルが変容しつつあるなかでの構造的な問題がみえてきた。これらの問題は、比較的高階層で知識や学歴もある夫婦であったとしても、個人の努力だけでは容易に乗り越えられない夫婦関係の難点があること、むしろ、高階層で知識や学歴もある夫婦だからこそ生活自体は専業主婦でもやっていけるなかでの息苦しさ、あるいは夫も妻も仕事に育児に奮闘するからこそそのジレンマに直面しているといえる。

高度経済成長期の「家族の戦後体制」(落合 [1994] 2019) のような近代家族モデル型の夫婦から、かたちとしては多様であるが平等かつ互恵的な関係へと向かいつつあるなかで、夫婦関係をめぐる状況も夫婦を意味づける枠組みも大きく変容してきている。しかも、その変容のかたちや進度は、個人や社会的背景、これまでの経験によっても異なる。大局的な見地からいえば、妻のロールモデルは専業主婦から働く母親へ、夫のロールモデルは「権威としての父親」「父親不在」から「ケアラーとしての父親」へ(多賀 2005)と変わってきているといえるが、“夫婦規範の無効化”で示したように、もはや現実の夫婦関係における関係をとらえる「型」は必ずしも一様・一定のものではない。

たしかに、先行研究で指摘されたように、夫婦の親密かつ対等なコミュニケーションが重視されているからこそ、「話し合えない」ことが当人たちにもカウンセラーたちにも問題とされている。そこでめざされるコミュニケーションのありようは、夫婦間のアサーション(野末 2015 など)や Giddens (1992 = 1995) の「純粋な関係性」ともそれほど大きくかけ離れてはいないだろう。

しかし、多様な社会背景に埋め込まれた実際の夫婦において、そのような心理学的な言説にもとづくコミュニケーションを実践することは容易ではない。とくに、【話し合い不成立】なケースでは、明らかな他人ではなく「気の置けない夫婦」を前提にするからこそ、言葉を尽くすことなく自分の感情のままに話し合おうとしてしまった結果、話し合いが成立しなくなっていた。また、【一方通行】ケースは「話し合おう」という段階にすら至りにくいという点で、コミュニケーションをどこまで重んじるかという理想像のレベルでさえ大きな相違がある状態である。そして、【話していない】ケースのように衝突を避けるからこそ率直な感情表出ができないときや、【話し合い不成立】ケースのように率直な感情表出の結果、ケンカになってしまうとき、【一方通行】ケースのように双方向のコミュニケーション自体が成り立たないときに、当人たちだけでは対処のしようがなくなってしまうことがあるのだ。

以上、本稿ではカウンセラーの視点をとおして実際の夫婦関係の悩みをとらえ、コミュニケーションのかみ合わなさ、どのようなかたちで生じうる問題なのかを「話し合えない」夫婦の典型例に焦点化して分析・考察してきた。その結果得られた知見をまとめると、多くの夫婦や言説上でも親密で対等なコミュニケーションが重視されているにもかかわらず、その理想像や夫婦の置かれた社会状況のなかで、実際の夫婦のやりとりではコミュニケーションレスや衝突、すれ違いが生じ、話し合いが行き詰まりうるということである。

この知見は、あくまで夫婦関係相談を専門とする一部のカウンセラーの語りの分析から得られたものであり、「方法論的限定」というM-GTAの手法上の特色からも日本の夫婦全体に一般化できるようなものではない。来談者が属性上限られるなかで、比較的社会階層が高い30・40代に顕著な問題を析出したにすぎない。しかし、本稿は多様な専門性をもつ経験豊富なカウンセラーの語りに着目することで、心理学的介入が必要な機能不全に陥った夫婦の問題としてではなく、意識・言説上はジェンダー平等に向かいつつも、固定的性別役割分業の見なおしを実生活でも進めるなかでの夫婦の日常的な、だが当人たちのみでは対処しづらい社会構造に結びついた葛藤を明らかにした。

謝辞

本研究は「奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター 2021・2022 年度研究課題助成金」を受けました。センターとインフォーマントの方々に深く御礼を申し上げます。

注

- 1) いわゆるDV防止法の制定により家庭内暴力など喫緊性や命の危険を伴う場合は、警察や行政による介入もありうる。夫婦カウンセリングにおいても家庭内暴力の事例がないわけではないが、本稿ではより顕在化しにくく、社会的に軽視されてきた夫婦間の日常的な「話し合えない」の問題に焦点を絞る。
- 2) 最新のNFRJ18では、28～32歳のみ妻から夫への評価のほうが夫から妻への評価よりも高くなっている（全国家族調査委員会 2023: 39）。
- 3) 1回あたりの相談費用の相場は5,000～16,000円ほどと幅があり、カウンセリング時間は1時間から2時間程度のところが多い。
- 4) C・Dさんのところでは総来談数のうち5割くらいを占めるという。

文献リスト

- Alexy, A. 2020 *Intimate Disconnections: Divorce and the Romance of Independence in Contemporary Japan*. Chicago: Chicago University Press. (濱野健訳 2022『離婚の文化人類学——現代日本における〈親密な〉別れ方』みすず書房。)
- 朝日新聞「父親のモヤモヤ」取材班 2020『妻に言えない夫の本音——仕事と子育てをめぐる葛藤の正体』朝日新聞出版。
- Bellah, R., R. Madsen, W. M. Sullivan, A. Swidler, & S. M. Tipton 1985 *Habits of the Heart: Individualism and Commitment in American Life*, Berkeley: University of California Press. (島藺進・中村圭志訳 1991『心の習慣——アメリカ個人主義のゆくえ』みすず書房。)
- Giddens, A. 1992 *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*. Cambridge: Polity Press. (松尾精文・松川昭子訳 1995『親密性の変容——近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』而立書房。)
- 池田知加 2017「自分と家族の人生相談——読売新聞『人生案内』欄を資料として」『立命館産業社会論集』53(1): 29-48。
- Illouz, E. 2012 *Why Love Hurts: A Sociological Explanation*. Cambridge: Polity. (久保田裕之訳 2024『なぜ愛に傷つくのか——社会学からのアプローチ』福村出版。)
- 稲葉昭英 2011「NFRJ98/03/08から見た日本の家族の現状と変化」『家族社会学研究』23(1): 43-52。
- 木下康仁 2003『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践——質的研究への誘い』弘文堂。
- 木下康仁 2009「M-GTAとは」M-GTA研究会(実践的グラウンデッド・セオリー・アプローチ研究会) ホームページ <https://m-gta.jp/mgta.html> (最終閲覧日 2024年10月9日)
- 木下康仁 2020『定本M-GTA——実践の理論化をめざす質的研究方法論』医学書院。
- 中里英樹 2023『男性育休の社会学』さいはて社。
- 西野理子編 2022『夫婦の関係はどうかわっていくのか——パネルデータによる分析』ミネルヴァ書房。
- 野末武義 2015『夫婦・カップルのためのアサーション——自分もパートナーも大切にする自己表現』金子書房。
- 落合恵美子 [1994] 2019,『21世紀家族へ——家族の戦後体制の見かた・超えかた [第4版]』有斐閣。
- 大瀧友織 2002「夫婦間に生ずる問題とその変遷——『人生案内』の分析をととして」『年報人間科学』23(2): 359-79。
- パッハー・アリス 2022『したいけど、めんどくさい——日本のセックスレス現象を社会学する』晃洋書房。
- 孫詩彧 2022『家事育児の分担にみる夫と妻の権力関係——共働き家庭のペアデータ分析』明石書店。
- 多賀太 2005「性別役割分業が否定される中での父親役割」『フォーラム現代社会学』4: 48-56。

山田昌弘 2005「家族神話は必要か？——第二の近代の中の家族」『家族社会学研究』16(2): 13-22。

全国家族調査委員会 2023『第4回家族についての全国調査(NFRJ18) 第一次報告書』https://nfrj.org/nfrj18_pdf/reports/1_overview.pdf (最終閲覧日 2024年12月20日)